

## いじめ場面の集団の認知

— いじめ-いじめられの立場から —

鈴木康平\*・田口広明\*\*・田口恵子\*\*\*

## Group Recognition in Cases of Bullying

— Bullies' and Victims' Perceptions —

Kouhei SUZUKI\*, Hiroaki TAGUCHI\*\* and Keiko TAGUCHI\*\*\*

(Received September 2, 1996)

We have been investigating bullying in school from the view point of developmental social psychology. In this research, we administered a questionnaire to 189 elementary schoolboys and girls, which contained 6 major questions concerning various aspects such as experience of bullying or being bullied in their classes or extra-curricular activities in school, characteristics of the group in which bullying occurred, the existence of victim-support, traits of the supporter and impressions of group atmosphere. We were able to obtain some stimulating results, i. e., victims perceived the group in more negative and unattractive terms than bullies, and they had a strong and positive impression of their supporters.

**Key words :** bullying in school, characteristics of group, victim-support.

### 問 題

われわれは、いじめの問題を発達社会心理学的、集団力学的観点から究明しようと努力を続けている。小学生から大学生、そして現職教師のそれぞれの立場からのいじめについての様々な側面の認識、意見等を聞いてきた(鈴木, 1989a, 1989b, 1990 鈴木・田口・田口, 1991a, b, c, 1992a, b, c, 1993, 1994, 1995)。われわれは先に(鈴木・田口・田口, 1995)、いじめる者といじめられる者によるいじめの場での集団の特性の認知のあり方を探り、いじめる立場といじめられる立場では、いじめ発生時の集団の特性の認知に差があること、さらに、いじめられる者をサポートする友達についての認知にも食い違いがあることがほのめかされたことを報告した。今回はその観点を更に掘り下げ、小学生のいじめ発生の際の集団についての両者の立場からの認知の違いを、その集団自体の特性、集団内の特徴的な成員の存在の視点から詳しく調べてみることにした。

われわれが設定したおもな仮説は、「いじめた者といじめられた者とでは、いじめが生じた場の集団の認知が異なるであろう。いじめた者はいじめ発生の際(集団)の認知を、いじめられた者よりポジティブに認知し、いじめられた者はそれをネガティブに認知する傾向があるであろう。」「いじめた者といじめられた者とでは、集団の特徴的な成員の存在の認知が異なるであろう。」

1) \* 心理学科 \*\* 荒尾市立荒尾第二小学校 \*\*\* 熊本市立河内中学校

2) 本研究は、日本グループ・ダイナミクス学会第43回大会(1995 学習院大学)において発表されたもののまとめである。

いじめられた者は、いじめの解決にポジティブに働きかけうる成員の存在を認知しがたい傾向にあるであろう。」というものである。

## 方 法

調査対象 小学5,6年生児童 男112名女77名,合計189名

調査期日 平成7年7月

調査方法 質問紙調査法,担任による集合一斉調査

調査項目

1. いじめられた経験の有無 (1) いじめられた時期 (2) いじめられ方 (3) いじめられていた時の集団の種類(学級,クラブ,その他) (4) その集団の雰囲気 (5) その集団に対する準拠意識の強さ (6) その集団の特性 (7) その集団内の特徴的な成員の存在
2. いじめた経験の有無 これについても上述の(1)から(7)までと同様な視点からの質問をする。
3. いじめ一般についての意見 (1) いじめは人間の本性か否か (2) いじめは根絶可能か否か
4. いじめられていた時のサポーター (1) サポーターの存在の有無とその特性 (2) いじめた人の仲間の有無とその特性 (3) 傍観者の存在の有無とその特性 (4) 無関心グループの存在とその特性の認知
5. いじめた時についても上記4と同様の視点からの質問を設けた。

上記の1,2とも,(1),(2)については自由記述,(3)については複数の選択項目の中から該当する項目ひとつを選択,(4)については図1に示すような「明るいーくらい,あたたかいーつめたい,……すきなーきらいな」の10対の項目に対してそれぞれ5段階評定,(5)については3個の選択肢「いじめが発生した集団から早く離れたいーそこに入っていていなくてもかまわないーずっと離れたくない」の3つの選択肢のうち該当するもの1個を選択,(6)については,いじめられた(いじめた)グループの特性13項目についてそれぞれ5段階評定,また(7)については,その時の(いじめられた・いじめた)集団の中にどんな人がいたか10個の特性それぞれについて3件法による回答を求めた。3については(1),(2)とも5段階評定で回答を得た。4,5についてはそれぞれの特質を①その集団の中心的存在 ②その集団の中で信頼されている程度 ③その集団での親交の程度 ④その集団を楽しくしたり活性化する程度についてそれぞれ5段階で評定,特にいじめられている子のサポーターの認知については,いじめられている時はもちろん,いじている時に,自分がいじている相手のサポーターをどのように認知していたかといった視点から質問を設定した。

## 結 果

1 いじめられーいじめの経験の有無:いじめられた経験がある者は,男子で24.1%,女子で35.9%であった。それに対し,いじめた経験がある者は,男子で13.4%,女子で15.4%であった。約3分の1の子供たちがいじめに直接何らかの関わりを持っていることが窺える。

2 いじめの場:ここではいじめが「学級」「同じ学年」「クラブ」などのどの集団で発生したの

かを聞いたが、いじめられた者もいじめた者も「学級」と答えた者が圧倒的に多かった（いじめられた62.5%、いじめた56.9%）。

3 いじめのあった集団の雰囲気：項目ごとに、「立場」（いじめられ/いじめ）×性（男/女）の2要因分散分析を施したところ「性」の主効果に有意な項目はなかったため男女こみにした結果を表1-1、表1-2及び図1に示した。「立場」つまり「いじめられ/いじめ」の主効果が有意であったのは、「あたたかい-つめたい、まとまりのある-ばらばらな、大切な-どうでもよい、親切な-不親切な、落ち着いた-落ち着いたない、すきな-きらいな」の5対の項目（1%の有意水準）と、「明るい-暗い、いごちのよい-いごちの悪い、のびのびできる-きゅうくつな」の3対の項目（5%の有意水準）であった。いずれもいじめられている子はいじている子より、その集団（学級やクラブなど）をネガティブな方向で認知していることが示された。

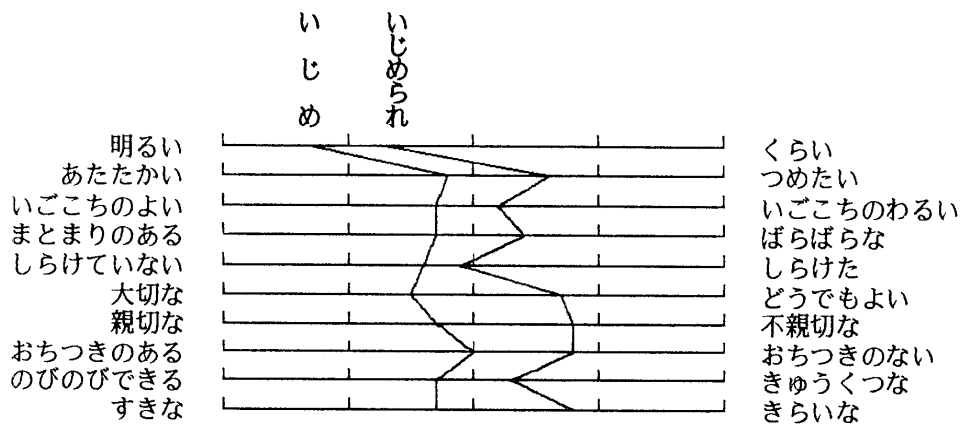


図1 いじめが生じたときの集団の雰囲気認知

表1-1 いじめのあった集団の雰囲気についての認知

場面	項目 群別	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	(9)	(10)
		M SD	M SD	M SD	M SD	M SD	M SD	M SD	M SD	M SD	M SD
い ら じ め	男(n=27)	2.48(1.32)	3.52(0.92)	3.89(0.79)	3.30(1.08)	3.00(1.41)	3.70(0.97)	3.81(1.02)	3.89(0.96)	3.22(1.23)	4.01(1.12)
	女(n=28)	2.13(1.08)	3.71(1.03)	3.57(0.94)	3.50(0.87)	2.93(1.03)	3.64(1.01)	3.82(1.00)	3.64(0.89)	3.32(0.80)	3.68(0.89)
い じ め	男(n=15)	1.71(1.10)	2.67(1.14)	2.60(1.40)	2.87(1.15)	2.60(1.36)	2.60(1.20)	2.40(0.80)	3.00(1.41)	2.87(1.15)	2.47(1.26)
	女(n=12)	1.66(0.75)	2.92(1.26)	2.75(1.36)	2.58(1.11)	2.58(0.95)	2.42(1.11)	2.92(1.26)	2.92(0.95)	2.58(1.26)	2.83(1.14)

表1-2 集団の雰囲気の数値についての2要因分散分析

(F値を示す)

	df	(1) F	(2) F	(3) F	(4) F	(5) F	(6) F	(7) F	(8) F	(9) F	(10) F
A(場面)	1	5.147*	10.338**	4.630*	7.309**	1.615	19.532**	22.050**	10.348**	4.260*	20.954**
B(性)	1	0.536	0.744	5.144*	0.032	0.023	0.209	1.161	0.435	0.129	0.003
A×B	1	0.301	0.014	8.120**	0.963	0.007	0.052	0.075	0.115	0.531	1.746
Error	78										

+ p < .10 \* p < .05 \*\* p < .01

4 いじめのあった集団への準拠意識：これについては「そのグループからはやくはなれたい」「そのグループに入っていていなくてもかまわない」「そのグループからずっとはなれたくない」の3項目のいずれか一つを選ぶよう求めた(表2-1)。いじめられた場合、「ずっとはなれたくない」という意識が非常に少なく、「はやくはなれたい、入っていていなくてもかまわない」と

の差が大きい(表 2-2)。特にいじめられた女子においては「はやくはなれたい」が 78.57%と多くなっている。

表 2-1 集団への準拠意識

場面	性別	① ② ③		
		n (%)	n (%)	n (%)
いじめられ	男(n=27)	12 (44.44)	14 (51.85)	1 (3.70)
	女(n=28)	22 (78.57)	6 (21.43)	0 (0.00)
いじめ	男(n=15)	6 (40.00)	6 (40.00)	3 (20.00)
	女(n=12)	5 (41.67)	5 (41.67)	2 (16.67)

表 2-2 集団への準拠意識の尤度比検定

	df	$\chi^2$
A × C (場面 × 所属意識)	2	8.136*
B × C (性 × 所属意識)	2	5.049
A × B × C	2	2.600
Total	6	15.830
+ p < .10 * p < .05 ** p < .01		

①離れたい②どちらでもよい③離れたくない

5 いじめの場となった集団の特性の認知：13 項目の集団の特性(項目の内容は図 2 を参照)について 5 段階評定で応答を得た(表 3-1)。立場 × 性の 2 要因分散分析を施したところ(表 3-2)、13 項目中 11 項目において「立場」の主効果が有意あるいは有意な傾向を得ることができた。即ち、1%の有意水準で「立場」の差が認められたものは、「友達のことをお互いに世話をする、思いやりのある、協力する、よいグループになろうとする、目標がある、秘密や約束を守る、満足感がある」の 7 項目で、5%水準で有意差が認められたのは「友達のことを真剣に考え助ける、楽しく安心していられる、先生や大人のいうことを素直に聞く」の 3 項目で、10%の水準で有意な傾向

表 3-1 集団特性の認知

場面	群別	(1)		(2)		(3)		(4)		(5)		(6)		(7)	
		M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
いじめられ	男(n=27)	3.67	(1.19)	3.52	(1.40)	3.19	(1.47)	3.67	(1.31)	3.52	(1.29)	3.48	(1.40)	3.63	(1.31)
	女(n=28)	3.46	(1.18)	3.79	(1.08)	3.68	(0.97)	3.96	(0.94)	3.57	(0.90)	3.82	(0.85)	3.75	(0.95)
いじめ	男(n=15)	2.93	(1.12)	3.20	(1.17)	3.33	(1.14)	3.20	(1.11)	3.00	(1.32)	2.87	(1.15)	3.07	(0.93)
	女(n=12)	2.67	(1.03)	2.83	(1.21)	2.58	(1.04)	2.92	(1.32)	2.33	(1.31)	2.92	(1.19)	2.92	(0.95)

表 3-1 集団特性の認知 (つづき)

場面	群別	(8)		(9)		(10)		(11)		(12)		(13)	
		M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
いじめられ	男(n=27)	3.67	(1.52)	3.30	(1.38)	3.59	(1.19)	3.26	(1.26)	3.48	(1.40)	3.22	(1.62)
	女(n=28)	3.82	(1.07)	3.79	(1.15)	3.89	(0.94)	3.67	(1.10)	3.58	(1.25)	3.56	(1.31)
いじめ	男(n=15)	2.67	(1.40)	3.07	(1.29)	2.93	(1.24)	3.29	(1.33)	3.00	(1.36)	2.43	(1.18)
	女(n=12)	2.17	(1.28)	2.50	(1.12)	2.75	(1.23)	2.67	(1.37)	3.50	(1.11)	2.83	(1.34)

表 3-2 集団特性の認知についての 2 要因分散分析

(F 値を示す)

	df	(1) F	(2) F	(3) F	(4) F	(5) F	(6) F	(7) F	(8) F	(9) F	(10) F	(11) F	(12) F	(13) F
A (場面)	1	7.536**	4.639*	2.754+	7.228**	9.813**	7.260**	7.091**	17.136**	6.298*	10.889**	2.619	0.789	5.014*
B (性)	1	0.711	0.028	0.202	0.000	1.294	0.484	0.003	0.299	0.017	0.048	0.123	0.906	1.188
A × B	1	0.008	1.160	4.595*	1.030	1.723	0.268	0.268	1.031	3.063+	0.774	2.953	0.403	0.008
Error	78													

+ p < .10 \* p < .05 \*\* p < .01

が示されたのは「よくまとまっている」の項目であった。全体的に、いじめられた者は、その集団の特性をネガティブな方向に認知していることがいえる（図2）。

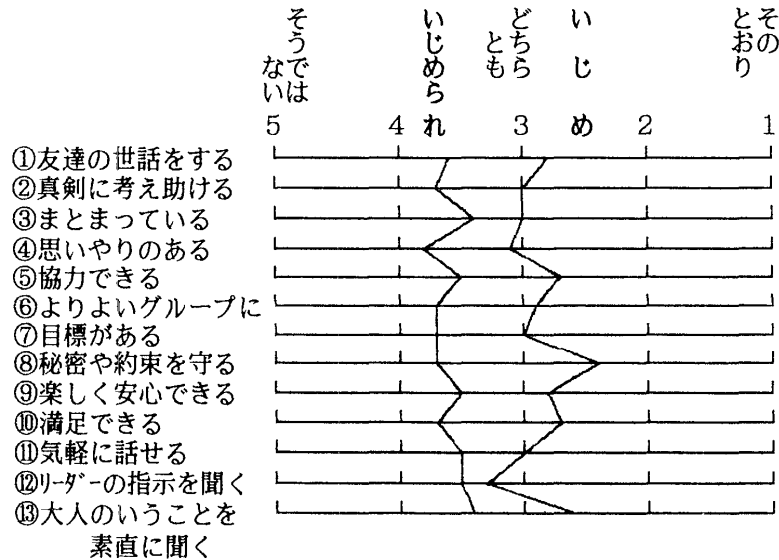


図2 いじめが生じたときの集団の特性の認知

6 集団内の特徴的な成員の存在の認知：集団の中に「悩みや心配事を相談できる人、一緒に遊んだり行動したりする人、心配したり親切にしてくれる人、いじめを止めてくれる人、いじめをだまってみている人、気が合う人、気が合わない人、力が強くけんかが強い人、わがままな人、あだ名をいったり差別をする人」がいたのかどうかについて問うた。この結果（表4-1）について、3要因クロス表の尤度比検定を行った（表4-2）。1%水準で有意な関係が見られたものは、「悩みや心配事を相談できる人、いじめをだまってみている人、力が強くけんかが強い人、あだ名を言ったり差別したりする人」の4項目であり、5%水準で有意な関係が見られたものは「心配したり親切にしてくれる人、気が合わない人」の2項目であった。これを見ると、いじめられたものは、いじめを軽減・解消する方向にある人物の存在を意識することは少なく、いじめを深化させると考えられる人物の存在は意識されやすくなっていることがわかる。

7 いじめをとりまく集団の認知（いじめられた時、いじめた時の周りの人々の認知）：いじめられた時：サポーター、自分をいじめた人の仲間、いじめられるのをただ見ていただけの傍観者、

表4-1 集団内の成員の特性の認知

面	群別	項目	項目									
			n <sup>(1)</sup> (%)	n <sup>(2)</sup> (%)	n <sup>(3)</sup> (%)	n <sup>(4)</sup> (%)	n <sup>(5)</sup> (%)	n <sup>(6)</sup> (%)	n <sup>(7)</sup> (%)	n <sup>(8)</sup> (%)	n <sup>(9)</sup> (%)	n <sup>(10)</sup> (%)
い じ め ら れ	男(n=25)	いた	5 (20.00)	13 (52.00)	5 (20.00)	4 (16.00)	16 (64.00)	10 (40.00)	16 (64.00)	17 (71.43)	15 (42.86)	16 (64.29)
		?	4 (16.00)	4 (16.00)	6 (24.00)	8 (32.00)	3 (12.00)	5 (20.00)	4 (16.00)	5 (21.43)	4 (28.57)	5 (21.43)
		いない	16 (64.00)	8 (32.00)	14 (56.00)	13 (52.00)	7 (28.00)	10 (40.00)	5 (20.00)	3 (7.14)	6 (28.57)	4 (14.29)
い じ め ら れ	女(n=27)	いた	9 (33.33)	11 (40.74)	10 (37.04)	6 (22.22)	13 (48.15)	11 (40.74)	21 (77.78)	20 (74.07)	20 (74.07)	19 (70.37)
		?	3 (11.11)	9 (33.33)	4 (14.81)	9 (33.33)	8 (29.63)	10 (37.04)	5 (18.52)	6 (22.22)	5 (18.52)	6 (22.22)
		いない	15 (55.56)	7 (25.93)	13 (48.15)	12 (44.44)	8 (22.22)	6 (22.22)	1 (3.70)	1 (3.70)	2 (7.41)	2 (7.41)
い じ め	男(n=14)	いた	2 (14.29)	9 (64.29)	3 (21.43)	3 (21.43)	3 (21.43)	4 (28.57)	5 (35.71)	4 (28.57)	10 (71.43)	5 (35.71)
		?	8 (57.14)	4 (28.57)	8 (57.14)	6 (42.86)	9 (64.29)	6 (42.86)	7 (50.00)	7 (50.00)	3 (21.43)	5 (35.71)
		いない	4 (28.57)	1 (7.14)	3 (21.43)	5 (35.71)	2 (14.29)	4 (28.57)	2 (14.29)	3 (21.43)	1 (7.14)	4 (28.57)
い じ め	女(n=11)	いた	3 (27.27)	9 (81.82)	4 (36.36)	2 (18.18)	3 (27.27)	7 (63.64)	5 (45.45)	4 (36.36)	2 (18.18)	3 (27.27)
		?	5 (45.45)	0 (0.00)	4 (36.36)	6 (54.55)	5 (45.45)	2 (18.18)	3 (27.27)	2 (18.18)	5 (45.45)	1 (9.09)
		いない	3 (27.27)	2 (18.18)	3 (27.27)	3 (27.27)	3 (27.27)	2 (18.18)	3 (27.27)	5 (45.45)	4 (36.36)	7 (63.64)

表4-2 集団内の特徴的成員の存在の認知についての尤度比検定

	<i>df</i>	(1) $\chi^2$	(2) $\chi^2$	(3) $\chi^2$	(4) $\chi^2$	(5) $\chi^2$	(6) $\chi^2$	(7) $\chi^2$	(8) $\chi^2$	(9) $\chi^2$	(10) $\chi^2$
<i>A</i> × <i>C</i> (場面 × 存在)	2	12.968**	4.938	7.942*	2.087	10.215**	0.387	6.974*	12.150**	2.840	11.606**
<i>B</i> × <i>C</i> (性 × 存在)	2	2.229	0.141	3.332	0.361	0.246	2.189	1.824	0.993	0.785	0.601
<i>A</i> × <i>B</i> × <i>C</i>	2	-0.289	7.513	-0.128	0.409	3.481	3.732	3.285	3.398	9.950**	4.234
<i>Total</i>	6	14.908	12.592	11.145	2.584	13.942	6.308	12.083	16.541	13.578	16.442

+  $p < .10$  \*  $p < .05$  \*\*  $p < .01$

無関心のグループそれぞれの存在の認識と該当するグループの特性について尋ねた（サポーターについてはサポートの仕方についても尋ねている）。いじめをした時：いじめている相手のサポーターの存在の認知，いじめをした時の自分の仲間，いじめの傍観者，無関心グループの認識，などを問うた。ここでは，その概要を述べる。いじめられている人のサポーターに対する認知については，いじめをしているときの相手のサポーターよりも，いじめられているときの自分のサポーターをよりポジティブに認知する傾向がある。また，いじめをしている人の仲間については，自分がいじめられているときの相手の仲間より，いじめをしているときの自分の仲間の方をポジティブな方向で認知しているようすが窺える。

これらのことからいじめの場の集団の認識には，いじめられる子といじめる子との間でかなりの食い違いがあり，いじめの解決にはその集団自体へのアプローチの必要性があるものと考えられる。いじめの解明に集団の視点からのアプローチが重要であることを示唆している結果といえよう。

## 謝 辞

本研究をまとめるにあたり，非常にご多忙な中を時間をさいて調査にご協力いただいた小学校の教師各位と児童のみなさんに心からお礼を申し上げます。なお，データ分析にあたり本学部助教授篠原弘章氏によるコンピュータ・プログラムを使用させていただきました。記して，感謝の意を表します。また，データ整理に際して助力をしてくれた学生諸氏にもあわせて謝意を表します。

## 参考文献

- 遠藤辰雄 1985 「いじめ」をめぐる非行 教育と医学, 33, 69-75.  
 古畑和孝 1985a 「いじめ」の構造を探る 学習指導研修, 8(2), 42-48.  
 古畑和孝 1985b 現今の教育問題と社会心理学よりの提言—日本社会心理学会シンポジウム特別報告— 児童心理 39(16), 195-204.  
 古畑和孝 1986 「いじめ」問題再考 学習指導研修, 8(11), 45-48.  
 蜂屋良彦 1986 「いじめ」深刻化の社会的要因は何か 学習指導研修, 8(11), 52-55.  
 稲村 博 1985 いじめの心理と病理 ジュリスト No. 836, 23-28.  
 桂 広介・長島貞夫・真仁田昭・原野広太郎編 1985 いじめを越える！—105人提言—児童心理, 39(13)  
 桂 広介・長島貞夫・真仁田昭・原野広太郎 1985 「いじめ」の心理と指導 児童心理, 39, (16)

- 森田洋司 1985 学級集団における「いじめ」の構造 ジュリスト, **No.83**(6), 29-35.
- 森田洋司 1986 いじめの四層構造論 現代のエスプリ, **No. 228**, 57-67.
- 文部省 1984 小学校生徒指導資料3 児童の友人関係をめぐる指導上の諸問題 大蔵省印刷局
- 文部省 1985 生徒指導資料第2集 生徒指導の実践上の諸問題とその解明 大蔵省印刷局
- 文部省 1991 生徒指導上の諸問題の現状と施策について 大蔵省印刷局
- 西日本新聞社社会部取材編 1985 弱者いじめ 西日本新聞社
- 篠原弘章 1984a 行動科学のBASIC第1巻 統計解析 ナカニシヤ出版
- 篠原弘章 1984b 行動科学のBASIC第2巻 実験計画法 ナカニシヤ出版
- 篠原弘章 1984c 行動科学のBASIC第5巻 ノンパラメトリック法 ナカニシヤ出版
- 鈴木康平・佐藤静一・篠原弘章・吉田道雄 1986 いじめの社会心理学的研究 熊本大学教育学部附属教育工学センター紀要, **3**, 97-115.
- 鈴木康平 1986a “いじめ”の背景・動機・対策 学習指導研修, **8**(11), 34-39.
- 鈴木康平 1986b いじめの心理—原因・動機と指導—日本心理学会第50回大会発表論文集, S.38.
- 鈴木康平 1987 現代社会といじめ再考 教育心理, **35**(1), 6-11.
- 鈴木康平 1989a いじめに対する小・中学生の認知 熊本大学教育実践研究, **6**, 61-81.
- 鈴木康平 1989b いじめに対する教育学部2年次生, 教育実習生, 現職教師の認知 熊本大学教育学部紀要 人文科学, **38**, 257-270.
- 鈴木康平 1989c いじめに対する態度 九州心理学会第50回大会発表論文集, 129-130.
- 鈴木康平・田口広明・高木恵子 1989a いじめに対する意見と原因の認知(1) 日本グループ・ダイナミックス学会第37回大会発表論文集, 129-130.
- 鈴木康平・田口広明・高木恵子 1989b いじめに対する意見と原因の認知(2) 日本グループ・ダイナミックス学会第37回大会発表論文集, 131-132.
- 鈴木康平 1990 いじめに対する態度と価値観 とくに小・中学生の場合 熊本大学教育学部紀要 人文科学, **39**, 285-302.
- 鈴木康平・田口広明・田口恵子 1990 いじめに対する意見と原因の認知 熊本大学教育学部紀要 人文科学, **39**, 303-317.
- 鈴木康平・田口広明・田口恵子 1991a いじめに対する態度と生活意識・価値観 熊本大学教育実践研究, **8**, 79-86.
- 鈴木康平・田口広明・田口恵子 1991b いじめに対する認知の研究(1) 日本グループ・ダイナミックス学会第39回大会発表論文集, 69-70.
- 鈴木康平・田口広明・田口恵子 1991c いじめに対する認知の研究(2) 日本グループ・ダイナミックス学会第39回大会発表論文集, 71-72.
- 鈴木康平・田口広明・田口恵子 1992a いじめに対する認知の発達社会心理学的研究—いじめ根絶視と「いじめ—いじめられ」の当事者に対する認知の観点から—熊本大学教育学部紀要 人文科学, **41**, 213-226.
- 鈴木康平・田口広明・田口恵子 1992b 「いじめ—いじめられ」の場の認知(1)—いじめへの態度と「いじめ—いじめられ」の場としての学級の雰囲気 日本グループ・ダイナミックス学会第40回大会発表論文集, 93-94.
- 鈴木康平・田口広明・田口恵子 1992c 「いじめ—いじめられ」の場の認知(2)—「いじめ—いじめられ」の場における当事者の特性の認知 日本グループ・ダイナミックス学会第40回大会発表論文集, 95-96.
- 鈴木康平・田口広明・田口恵子 1993 「いじめ—いじめられ」の場の認知—いじめへの態度と「いじめ—いじめられ」の場における学級の雰囲気と当事者の特性の認知— 熊本大学教育学部紀要 人文科学, **42**, 229-245.
- 鈴木康平・田口広明・田口恵子 1994 いじめにかかわる集団の特性の認知 日本グループ・ダイナミックス学会第42回大会発表論文集, 90-91.
- 鈴木康平 1995 学校におけるいじめ 教育心理学年報, **34**, 132-142.
- 鈴木康平・田口広明・田口恵子 1995 いじめにかかわる集団の特性の認知 熊本大学教育学部紀要 人文科学, **44**, 273-279.
- 鈴木康平・田口広明・田口恵子 1995 いじめ場面の集団の認知—いじめ—いじめられの立場から—日本グループ・ダイナミックス学会第43回大会発表論文集 148-149.
- 鈴木康平 1995 学校におけるいじめの心理 学習評価研究 FALL号 **No. 23**, 96-105.

- 鈴木康平・山浦一保 1995 いじめについての大学生の体験・認識と生活意識 熊本大学教育学部紀要 人文科学, **44**, 281-289.
- 鈴木康平 1995 いじめの実態・心理 教育と医学 **43**(11), 54-62.
- 鈴木康平 1996 学校におけるいじめの心理 更生保護(法務省保護局) **47**(8), 14-20.
- 鈴木康平・山浦一保 1996 いじめに対する現職教師の態度といじめ報道への印象・反応 熊本大学教育実践研究 **13**, 99-106.
- 鈴木康平 1996 攻撃性といじめ 祐宗省三編 子ども「大変な時代」教育開発研究所 26-41.
- 高木 修 1986 いじめを規定する学級集団の特徴 関西大学社会学部紀要, **18**(1), 1-30.
- 詫摩武俊 1984 こんな子がいじめ、こんな子がいじめられる 山手書房